
日常から始まった私の冒険日記

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常から始まった私の冒険日記

【著者名】

亀

N4645M

【あらすじ】

超×10がつく飛びぬけた美貌と頭脳、身体能力を兼ね備えた貴族のシェイデットがひょんなことから護衛のシークフリードと、妖精で友達のサンシャインと、ともに冒険に出る羽目になつた愛と冒険の物語

私の日常

「ショイデット様ー！ ショイデット様ー！」

あつ・・・アノ人の声だ。

私はショイデット・シルク・エルシードで貴族の中の貴族。だから・・・当然疲れるわけで今、しばし休憩中なんだけど私の好きなシークフリード・エルセウスが呼んでいるのでいかなきやその前にシークフリードは私の幼馴染にして、護衛なわけで、とても好きになつていい相手じゃない

でもな、スキなんだよなー・・・

つてこんなこと思つてる場合じやない！

さつむといかなきや！

「はいはい、いきますよ。待つてて」

「分かりました。」

本当は呼びにきてくれてうれしいんだけどそんなこと声に出したら、私の気持ちが、ばれちゃう！

とか思いつつ走つたらこけるので、つていちいち説明が遅れてるけど今、着てているのは動きずらい
真っ赤なドレスで、もうのろけ状態になつてるけどシークフリード
は、この国一かつこいいの！

だからもてるのも当然なわけいろいろと心配されるのよね
ゆっくり歩いていふと

と何者かが歩いてくる音がある。バツと勢い良く振り向くとそこには

コツ　コツ　コツ

「うそ、お姫様」

「うーーーー一番いやなやつ……サバンナ・マウフ・マウンテンダウ
ンがいた

金髪で赤い眼の私の家と並ぶ貴族だ。
少しがつこいのがシークフリードモビではないし何かと禿て薄るの
でスルーして進む
けど……！

何でついてくるのよ……！

とうとうここやになり思いつきついに現に出して

「うそでくんないーーー。」

「うそでいた。むりうんサバンナは畠然としている

（十分後）
やつとついた！

私の屋敷。

おやい！見たいな眼で見てくるシークフリード

「うそんなさい。」

素直にあやまつた。だって私が遅いのが悪かったんだもん

「別に怒つてしまふよ。とにかくあたしはもう嘘いので中に入
ってください。」

言われるままにする。

中に入つたらまづ飛んであるのがこの一瞬。

「何してたの?シェイデット?」

私の妖精のサンシャイン・シルク

白い天使のような翼が生えてきれいな金髪の緑の眼をした女の子w

私の自慢者w

で、スルーするのはいやなので今日あつたことをこと細やかに話した

そのあと食事

その後シャワー

その後睡眠

サンシャインは私の作ったぴったりのサイズのベットで寝ていて
シークフリードは私の部屋に角で愛刀の風影「両手剣」を抱いて座
つて寝ている

私も一緒に寝たいなーとか思いつつも私も自分のベッドでいつも

よつて睡眠をとる

いつもならそこで終わりだけど

深い居眠りに陥る直線!

ガサツ・・・ガサガサガサツ

物音が聞こえた

私の日常（後書き）

初心者です

名前を亀と申します

毎週金曜日に更新しますんでよろしければ読んでくださいな

私は何時もの様に近くにおいてある両手剣の「華影」を取ったあたりは夜なので当然の様に暗い。暗闇には、なれているもののさすがにちょっと見にくいいなでも、まあシークフリードがいることだし、大丈夫かな？サンシャインが耳元で

「敵の数およそ20人」

とささやいた。え、意外に多いよ・・・てことは、魔法全般つかえてしかも一般人で1撃で死ぬサンシャインに10体倒してもうひとつとして後は、私が倒すかつと、そうと決まれば倒すのみ！！

「サンシャイン10対倒して！！私は残りをつぶすっ！！！」

サンシャインが呪文の詠唱にかかる

「我が名はサンシャイン火よ我に従え！！」

いつたとたんにもう10人火達磨です～！私も早くたおさなきやな～だからもう波動でかたずけちゃおう

「はアアアアアツ～！波動の舞～！」

よっしゃ一撃！

10人倒しだぞ~

つてあれ、あれれ?

シークフリードがいない!!

どうじょう・

つてサンシャインもいないし!!

あ、紙がある

「お前の護衛と妖精は預かつた。返してほしくばサバンナ様の別荘にここへ。」

「ひとは、あの「わい」サバンナのところに行かなきゃなんないの~!!
行きたくない・・・・・

でも行かなきや~!!

ここから割りと近いし、てか隣だし。
もつと普通は遠くにしませんか!~?
とか思つてゐひまもないよな。

さて着替えるか。寝巻きのまんまじや動きにくいつたらありやしない
なので私のマイ冒険服

一見ジミーな半そでと半ズボンなんだけど、光のコーティングがし
てあって、しかも防水な~
だから冒険服に適してるわけ
さ、靴を履いてレッテゴー!!
もちろん窓からだよ~

2階の~。

あっちの屋根に飛び移つてつとおつと
落ちそうになつちやつた
もちろん気にしてる暇なんてない!!~
でも胸邪魔だな

「サバンナ! いい加減この縄を解け!! 風影を返せ!! お前

「うはシェイディット様がきたら俺みたいに縄で縛るつもりだろー。」

「なんだとお！」

言い争い？でも短剣持つていてよかつた。

卷之三

「來たわよ。」

「つ、捕まえろー。」

サバンナ、甘いわね。私がそんなに簡単につかまるでも！

う、うわわわわわわあああああああああ。

どんどん切り倒されていくという全員たおされた

「大丈夫？ シークフリード、サンシャイン！。今すぐ繩ほどいてあげるからね。」

誰もが一瞬でとろけるようなすんごいほじかるような笑顔で言った

「だ、大丈夫です。」

よ、良かつた。W
さてと、帰りますか

「さてと帰りますか」

これで何時もの夜が帰つて来るはずだったが・・・

「なにこれ~~~~~！。」

屋敷がめちゃくちゃに潰されていたのだった

奇襲（後書き）

それでどうなっちゃったのかな？

「何でつぶすの～！私の屋敷！！。」

「（亀）その方が手つ取り早く進むから～。」

「えええええええええ～」

「W」

てなわけでつづきもおたのしみに～

ちなみにたまに土、日、火にも更新しますんでW

冒険の始まり

「お父様～！～お母様～！～生きてたら返事して～～～。」

必死に両親を探す。

もし死んでたらどうしようつ・・・怪我してたらどうしようつ
そんな気持ちでこつぱこつ、どんどん涙があふれてくる。
どうしようつどうしようつ

そんな時誰かが私の背中をギュッと抱きしめてくれた
シークフリードだった

「大丈夫。きっと大丈夫だよ。だから安心してやるべれい」とを考え
て。」

「うん。」

「ありがとう。」

本日一回田のはじける笑顔で返した。
まず、瓦礫とかどかなきや。

「シークフリード、サンシャイン瓦礫をかたづけて～～私はお父様
とお母様を探す～～。」

「はい。」「

一人はてきぱきと作業に取り掛かった。

私はお父様とお母様を想像して私の式神サンとシェルにそれぞれ探すように命じ

私も出来る限り探し

お願いします。おとうさま、おかあさま生きてて……

それだけを祈りながら

（一時間後）

「主様、見つけました。」

「ビリ…ビリなのーー！」

「「それが…」」

よかつたといつよいつもサン達の一言で不安に変わった。
ねえどうなの？どうなの？

「それがなに？」

わたしは内心震えそうな感情を押し殺し平然を装つていった。
聞くのが怖かつたけど。

「息を…引き取られました…」

「…………。」

ああ、もうだめだ。

「「伝言があります。」

「何?。」

鳴きそつな声で言つてしまつた。

サンたちが

「「どうか生きててくれ、生き延びてくれ、この町はもう危なごとに森でもいいどこか遠く……です」

「分かつたわ、もう戻つてよろしく。」苦労であった。

「「はっ」

サン達が戻つたあと、私はシークフリード達の元に向かつた。シークフリードたちはもう終わつたらしくなぜか座つていた。仲よさそうにしゃべりながら……はじめはなんかいやだつたが、今はそれどころではない。

「どうかしましたか?見つかりましたか?」

シークフリードが氣がついたらしく声をかけてくれた。そのあと不機嫌そうにサンシャインも

「もう見つかったんだア。」

といつた。悲しいけど悲惨な事実を受け入れて話した。

「息……を……引取り……ました。」

途中で涙でとぎれとぎれになっちゃつたけどいえた。でもそれが思つた以上につらくて、もう涙が押さえきれない。

「え」

足遅く理解した一人。その後私が

おおお
」

と、思いつからなくてしまった。それをやわらかく抱きしめてくれた。
シークフリード、サンシャインがいた。

「大丈夫、俺達がついているじゃないか。だからもうなかないでシエイデット。」

「そうだね。泣いちゃいられないんだった。」

「え」

いつの間にかとまっていた。涙。事実は跡で受け入れなきや いけないんだつた。とにかく食料、武器ともつて森にいかなきや！

גָּדְעָן, רַבִּי עֲזָרָן

いまいち理解できていない一人なので、から十までおしえなきゃ

「あのね、お父様とお母様が最後に森に行きなさいっていったの。だから、食料、武器、テントなどを持つて森に行くな」と。

「ええええええええ」

「うそ」

「まじですか」

「まじです」

「わかつました」

承諾早つ…

ま、そのまつが良いけどね。

「来ました」

「早つ…」

ええ。早いな。まあ私は終わってるから

「ござれ、森へ…」

冒険の始まり（後書き）

「 「 「なんか唐突過ぎない? (ませんか?) 」 」 」
「 (亀) まま良いじゃないの。そのほうが楽だし...」
「 「 「樂じやない度思います。」 」 」
「 (亀) ≪」

そんなこんなで第二話です。

第四話も読んでね

W

森に行く前のショージと雑談

「で、ビリごとくの？」

「とりあえず。魔の森に行こうと思つんだけど。」

私が修行したと同じだし、しかも、全員私の僕だし（まあ、さすがに主とその使い魔っぽいのはむりだつたけどね）

だが、それを知っているのは、ショイデットだけだった。ので、当然危険度の超危険なところいくとなれば当然

「「無理ですーー！」」

とこう反応が返ってきた。でも、ショイデットにはなぜ無理なのかが分からなかつた。ので・・・

「何で無理なの。」

「「馬鹿じゃないですか？」」

くくくくくくく。馬鹿にされた。てことは、知らないんだ。

不思議と顔が緩んでフフッと笑つてしまつた。

二人は、不思議そうな顔をして

「「何で笑つてるんですか」」

と聞いてきた。その顔が余計におかしくて

「あはははは。」

と、笑ってしまった。「誌の顔が余計に険しくなつて

「「なぜわらつてるんですか！？」」

と呟つた。あ、やうだつた。説明しなきや

「えとね、まず笑つてたのは、一人の顔がおかしかったから。」

「「なんすと…」」

「あははは。」

「「もひ（ひたぐ）」」

「でね、魔の森のことなんだけれど、あそこ私こといつては一番安全
なところよ。」

「「なが～？」」

「だつて、主との使い魔らしき物意外は全員僕だから。」

「「ええええええええええ」」

「「」」

「「じやあ、早速いきましょ。」」

相変わらず、反応早いな～、そのほうがまあ樂つていえば樂なんだ
けどな、なんだかな～

「「早く来てください。」」

ええ～、もうあんなとこにいるし何でそんなに早いのかな～、行動
といい、理解力といい。

でもシェイデットはそれを上回る理解力と行動力を持っていること
を、まだ理解していなかつた。

森に行く前のちよじつと雑談（後書き）

「（シロイデット）なんかいろいろなつと進んでいくな。」
「（亀）めんどいもん。細かく描写するの。それに、苦手だし。」
「（ショイデット）読者の方々に理解してもらいたいにくらいですよ。」
「（亀）うつーーー。」
「（シロイデット）つたくーーー！」

なんとなくで第四話です。
第五話も読んで下さいね～ b

誰もいない森（前書き）

長い間放置してスイマセンでした！

夏休みはいりましたんでがんばって更新します！

誰もいない森

ザック

と、まあ来たわけですが。なんだかいつつもならすぐ出迎えてくれるのに・・・。
誰も来ない。

なんで？何でなの？？

不安がこみ上げる。だつて、お母様、お父様みたいになつて
るかもしれないんだもん！

ねえ、本当にどこのサン

サンはもの
け姫だと思つてくれたらいい。でも、シハイティック
とは、仲がいい

ウワオオオオオオオオン
ウオオオオオオオオン

あつ、もしかしてモロ?

モロも同様にもの
がいい

「モロサン---

何処なの? ビリビリこむの――――――。 「

ビリビリビリビリなの?.

モロ、サン! -!

ふと、サンの言葉を思い出した。

(私達を呼びたいときは、思いつきつモロみたいに遠吠えして――。
せしたらすぐに遠吠えで返すから)

そだ! 遠吠えだ。 そうと決まれば

ウワオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――――――――

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

いるーいるよー! サンとモロがいるー!

それを見ていたシークフリードとサンシャインは

((なにじるの (ンだ?)))

と、睡然としていた

が、もうそんな状態ではなかつた!

なんとショイデットが田の前から姿を消してしまつたからだ。

「 「 · · · · 。 」

「アカシハヤトシトガ。」

「アカシハヤトシトガ。」

「アカシハヤトシトガ。」

誰もいない森（後書き）

「（シヒ）今度ばかりわかれぬの~」

「（亀）わあね~。」

「「シヒイガシト様に早く会いたい・・・」

そんなこんなで第五話です

よかつたら感想書いてください

つまづきまつてなかつたひ~むんなさこへ~

実は

攫われたと思われているショイントッシュさん

でも実は攫られてなどいなかつた。

サンとモロを見つけたので秒速5000mといつ超高速で走つていたのであつた。

当然1秒もかからずについていた

「サン――――――

モロ――――――

会いたかったよ。」

「あら、早いわね」

「相変わらず早いな」

「「「ひあつ」」

――――――――――ん

突進したがために三人は一緒になつて、ねつこうがつた

「心配したんだからも――――――つ――。」

「「なんか知らんけど」」めん」「めん。」

「でも見つかってよかつた。」

「それはこっちのせりふだ。」

「なんで？」

「こっちの方が心配してたのに

「お前知らないのかー!?」

「えつ、何? 何! ?」

何が起こったのかな?

「エリ、今クリスつていう超強い女に荒らされてるのーーー。」

サン顔怖いよーでも、サンより強いつて私勝てないじやんーーー

勝てます

びひじょー

「あれ? サンシャインヒシークワードは?」

「あ、おいてきちゃった。」

あ～あ面倒だけど戻るか

「戻つてつれてくれる。」

走ろうとしたとき

「まつて！！」

ん？

「私も行く！一人じゃ危ないから（だぶんだけど）」

「わかったわんじや一緒に行こうー。」

ザン

と、一瞬にして二人の姿が消えた

実は（後書き）

わたくして次はやうなるのかな？

まあがんばってやつと第六話

次もお楽しみにしてください

「メンツやまつしまや

最強やあれるんだら・・・(前書き)

少なくてスマセソ

最強すぎるだろ・・・・

一方好きな人がいなくなつて大慌てのシーケフリードさんはといい
ますと シェイディット

と、闇雲に探していました。

サンが言つてた通りに

大きな化け猫が出て参りました。

ちなみに危険度は×8というものです】ぐる強いのです。

のハリスとなんどもあたのナーナ・ジョンもかうに、傷一一集わせる
ことは出来ません。

そこに、さあ大好きな人がやつてきました。
ショイイデット

誰かと一緒に

(誰だこの人)

とが思ひつゝも

多分仲間なんだろ？

と、勝手に解釈しているうちに

〃ギヤアアアアアア

とこうの猫さんの断末魔が聞けました。

「「え。」」

いや、いやいややばいってお一人さんよオ何での精靈界での最強
さえ倒せなかつたやつ倒してんの？

ありえんだろ？

あんなに強かつたつけ？

アイツの昔つて

最強やがれのうだろ・・・・(後書き)

めしづひや少ないけど

我慢していください

えつと、第七話です

第八は比較的早く投稿しますんでよろしく

ルートアルゴリズム（複数ルート）

かのむりやへりやになつてまおが

見てくださいこ

チートある話

そう、アイツの昔は・・・

つてあれ？思い出せねえー！

なんでだ？なんでなんだよー

くわつー。こんな自分が恥ずかしい

ごめん、ショイデット

「ねえねえ、そのこ誰？」

アイツ妖精。えつとー名前はたしかサンシャインだったつけ

「サン。」

ええええええええ、あの、ええええええええええええ

サンっていえば、あの神殺しのサンですか?????

「サンってあのか、神殺しの?。」

「うん。」

えええええええええまじっすか。

おいかい、とか何でい一緒にインの？

わけ分からん

とか思つていたら、声に出していたらしく

ショイデットが答えてくれていた。

「えつとね、私がまだ4～5歳のころこの森に探検に「はあ～！
？」

ないだろおかしいだろ

「探検に行つたらね、この森の魔獸たちに圧倒つてね、それでばし、
ばしと倒しちゃつてたら」

何で倒せるのかしいでしょ」「頭ぞりつかしてるんぢやだろつか・・・

「いつのまにか、刃向かう奴等がいなくなつて、それでサンと仲良
くなつて現在に至るわけ」

「そうよね～最初は弱いと思つてたらいつの間にか倒されたりとか
して」

「「ええええええええ～！～！～！～？？」

頭ぞりかしましたか？

「んじゃ、今倒せる?」

「わかんない」

「だからとも騒ぐ声がして

「やめておけ」

すんごい低い声なんですかご・・・

で、生でかい狼！？でかこれでまさか・・・

卷之三

おお～見事にはもつて、つてそれじゃいのじやない

まじっすか、アアもう神経がつてか頭がもうだめだ

サシシャインヒークフリーでが回転式

パタリ

「ええええええええ」

「なんで？」

「どうした？」

頭と体が分かる極限まで達していたのでもう許容範囲を越したのも

あり

現在に至るのであつた

チートある話（後書き）

ああああああ

こんなだめ作文なんてダメだ

とか思つていってもやつぱり

消せない亀でした

とまあ、かけたのでも、いつか

次回もお楽しみに♪

氣絶したあい（繪畫#1）

す、すくすくスマセンドした

本題にゲームンナカイ

でも今度はやがてやがて投稿をめぐらしあがの

氣絶しそうだ

氣を失つてしまつてゐる・・・

私つてそんなに変かな?

嫌われたらどうしようつ・・・

どうねりしよう

影でちよつぱり泣いてしまつた

私つて弱いな

よし、特訓特訓（剣の）

「ハツ、 、 、 、 てい、 、 、 、 、 」

わらわからひたすら広いところを素振り

「9876、 9878、 、 、 、 、 987654321、 、 、
10000000000、 」

はあ、はあ、はあ、疲れた

いつじうに田を覚まないなこつら、いい加減こめかみがぴくつ
いてきたけど・・・つて、

やばいやばい辛抱辛抱・・・

（～3時間経過）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いい加減覚ましてもう限界何すけび・・・

（～5時間経過）

耐えろ耐えろ私このびつじよつもない怒りを

よし素振りで精神統一

（～1日たちました）

さすがに途中仮眠を取りましたよ？

でも気絶でこれほど目覚めんやつ初めて見たよ

怒りを通り越して尊敬するよ

私じゃそんなに氣絶してられない

ま、気長に待つを

それを見ていたサンたち

「よく待つてられルよな」

「おみやげ」

「俺ならたたき起こしてみけどな」

「あの「銀の魔女」がねえ」「

「そうだな、銀色の髪、つややかな唇、
でるといいではないと
いふはでないと」これがまた

「もみじ」

「悪い悪い」

「でも、たいていの男はほつとかないよな」

同感

お前もな

卷之三

「笑」

二
ば
か

～シヨイテシト～

私は今一応土に木をさして丸太を紐で木くくりつけて丸太を揺らして避けながら木の上を跳ぶという作業を繰り返しています。

ちなみにこれもつかれこれ三時間ほどやつてるんだけど・・・

あははは

もつこいつ等たたき起こしていいかな??

ふふふ

いや～さすがに、ね

私も限界があるつてゆうか

うん

つたたき起しそう

氣絶しちゃう（後書き）

「何で投稿しなかったの？」

「出来なかつたんですよ」

「なぜ？」

「なぜかログインできなかつたんですね。はい」

「どうせこ」

さて次からはシルバーティッシュをします

お楽しみに～

過去（前書き）

みじかいよ

過去

つと・・・

最初は思つてたけど。

やっぱ無理！

なので久しぶりに昔の思いにふけつてますか

それは15年前くらいかな

私はまだ日本人で格闘系はすべて何段かとつてて

学力は学校内でトップクラスへ

というまあ、超人？見たいな感じですね

で、なぜか男と女にまあ好意をもつていただいてて

楽しい毎日でしたよ・・・

あの事件しかなければ

私は何時もの様に学校を終え帰つてました

そしたら軽トラがこっち向かって来て

ドカーネン

ですよ。

でも持ち前の運動神経で何とか避けましたよ？

でもな、

何処からともなく槍がざつと三万本ぐらい振ってきて串刺し状態で意識とびました。

そのとき思いましたね銃刀法違反でないかな？ つと

それともう一つ

神様なんのためにいんの？

意味なくね？

つと、だからってわけでもないけど神様が謝りに来て……つて来なかつたら絶対呪い殺してたよね

で神さんが言つたのです。

「何でも願い3つ叶えてあげるから～異世界だけどもう一回蘇らせ
てあげるから～」

と、言つてきたのです。

願いなんてあるはずなく・・・

あ、でも異世界行ってみたいと、思いましてね

「いいですよ。」

言ってしまったね

「んじゃ願いをどうだ。」

「その一、能力今の私の500倍ね
その二、私は神の能力が使えます
その三、私は魔法が使えます
ちなみに魔法は妖精さんだけ使えるよつとしてね」

「まあ了解です。

神の能力は妖精も使えない「回復」が使える」とです。」

(シラボツ)

「まあ行きますね。えいつ

はい、転送です。

転送先は、赤ちゃんでした。

貴族のわ子です。

なんかうれしいような・・・

「まあ、なんてきれいな子でしょ、うー。」

「やうだな、私達にそっくりだ」

バカップル？ 親ばか？

「名前は・・・シェイデット・シェイデット・シルク・エルシード
だ」

なにそれ

なぜ名前が影の意味のシェイデット？

意味不！

過去（後書き）

過去編ね

一回きります

次も過去編

護衛との思念（前書き）

これで過去編オーわり

まあ、名前はショウがないとして

赤ちゃんってどんな泣き方すればいいの？

(じきとうじやうじ)

「ハヤー。こまわりなんで、でてくるのよ

てかこれってテレパシー？

(ピーンポーン大正解)

ほんと殺していい？

(ちゅう、それマジで勘弁な)

でも、私の本気の能力地つてどれ位なんだろつか・・・

(神を素手で殺せる)

おおすげえ

(めんどうから赤ちゃん期飛ばしますり イ作者)

当然ながら言葉は3ヶ月で覚え一足あるけ

なんでもできるスーパー赤ちゃんでした。

7歳のころ

私は何時ものように裏山でほんをよんでいた

ここにも慣れてきたしまあ快適だし、いいことずくめじゃん。それに華影ももりつたしね

そんなことを考えていた。

そのとおり、田の前を黒い影がよぎつた。なんとな〜く追いかけいくと・・・

同じ年ぐらいこの男の子がいますね

しかも追いかけられえてるし

助けますか

華影を手に取り向おうとした時

「あぶない！..」

男の子の声が聞こえ一瞬にして私に襲い掛かってきた黒いのを一刀両断した。

おお、なんか強い。けど、甘い！

私は男の子に襲い掛かってきていた黒いのを切った

つて、男子大丈夫？

「大丈夫？」

「あ、ああありがと」

「いえ、いやいやありがとうございます」

極上スマイル～

男子さん怪我しまくりだけど？

直すか

「おまえ、名前は？」

「普通は先に名乗ると思つただけだ」

「どうか、俺はシーケフリードだ。」

「わたしは、シェイテットです」

「俺お前氣に入った。お前の護衛になるーー。」

「??」

「えつ、ええええええええええ」

「そんなに驚くかよ」

「えつと、じゅあゆじへ
「へじぐるわな」

「じぐるわな」

「怪我治すね

「いいって

「えんじょは無用ー

まずエリシアシールドはって、んで、回復

以外に楽しーなー

てか、顔まつつかだし

かわいいよ

「よし、終わりー！」

「てか、お前は大丈夫なのかよ

「うん、治療済みだし

「怪我したのか！？」

「え、うん

「じめん」

「なんで」

「お前にけががれせりまつた。」

「これは私がつけたのだよ?」

「でも、『ぬいじべ』ねんなぞー。」

「あひび」

ふわっと私は護衛さんを抱きしめていた

「私は大丈夫だよ。だからなかなかないでいいよ、それに私のために心配してくれてありがとう」

「・・・」

囁く様に言った。つてえええええ私なにやつてんの

「あ、」めん

「へや」のままで居たい

「え、あひび」

「そんな」ともあつ、まあげんぞこにいたるわけです。

なつかしーな

何での時「」のままで居たい「なんてこののかな?」

今でも不思議です。

夢と現実（前書き）

最初のほつせんいけど

夢ですよ~

夢と現実

「今まで寝てるのかな？」

「おひやつと

「シーケンスコード起きて」

「ん

一瞬でおきた

「ふああああああよく寝た

あんたね

「シーケンスコード

「なに?」

「話がある」

「なに?」

「いいからいいから

え、なんで?

とにかくつこでこつて

なんか泉の前にいます。

「ショイテツ」

「なこ？」

「お前つて俺のこと好きか？」

「いきなり聞いてきた――――――

「シークフリードさま？」

「俺は好きだけど」

「えつと、どこが」

「全でがつてダメかな？」

「ダメじゃないけど・・・・・

「からかってるの？」

「からかいでこんな」と言えるかよー。俺は本気だー。」

「私も好き」

「まじかやつた――――――」

「ーーー？」

「なあ」

「な」「?」

「・・・いやひょこーせ」

「?」

「なんでもない」

「なんだ」

「一いつ回りもここか?」

「なに?」

「お前の廻せ俺が奪ひ

「なんぢやーー」とを

「それだけだからなー。」

「ふうご」

「なんだよ」

「口ヲチ向いて」

「ん?」

チヨウ・・・・・

「……」

「私から奪つた!」

「んな・・・・・」

私はなんて大胆なことを…!

「こんこやろ・・・・」

「W」

「顔真っ赤かだよシークフリードさん」

「くへへへへへ」

「おい」

「ん?」

「口ッチ向け」

「うん」

ちゅつ

「ん～～～～～～～～～」

何でいきなり

唐突す^ガ

つてあたしもか

大好きな人とのキスってこんなにもいとおしいなんて

「ククッ」

「何で笑うのよおお」

「子犬みたいで可愛いなと思つただけですよ?」

「だけらつて笑わないでよね。恥ずかしい」

「やつぱ可愛す^ガ」

んも、でもうれしいな。

俺はなぜかこういつ夢を見た

(これ夢ですより^Y作者)

現実

「おきないな」^ヒ「

「燃やしたるか？」

独り言です

「おはよ」

「遅いよサンシャイン」

「じめん」

「まあいいけどね」

「こいつよりかはましだし

てかなんでおまつかつかなの？」

(夢のせいです)(作者)

「水かけよつか？」

「うふー思いつきつかけてネサンシャイン♪」

(うあ、顔笑つてるのに眼が笑つてないしなんか黒いオーラが・・・
セサンシャイン)

「早くしてね?」

「は、はい」

バシャ

洪水並の水かかりましたね

まあこいねど

「ふあああ。よく寝た」

「「寝やせじやせ」」

「「みんなやせ」」

夢と現実（後書き）

あ、なんか意味つな感じですね

スマセンね

まともに書ければいいのに
ちつとも

主人公にとつて弱い・・・

ほんとにもつ

シークフリードつたら寝すぎーー

「そういえばサン」

「何?」

「何であの子猫襲つてきたの?」

そうだつたすつかり忘れてたなんで私肝心なこといつの忘れてたんだろう

まあいえたから結果オーライで

「クリスのせい」

「あれクリスの手下だつたの?」

「うん。 しかも幹部並みの」

弱いなクリス絶対すぐ終わるな。

「で、ビリヒーの?」

「あのお城」

「三才圖會」……」

ドンだけ自意識過剰なんだか

「んじゃあ、尾のお城のひとつが

「はあ？」

「無謀だろ」「」

「なんで？」

「 「 「 「 なんでつていわれても・・・・・」 」 」

んじゅ置いてこい。

(流れ弾が来るわけない b y 作者)

「んジャ行つてきま～ス」

「いやいやいや大丈夫だから3分で戻つてくるから」

ପ୍ରକାଶକ

「九月一號」

あつけない戦い（前書き）

短いです

魔王さん弱いですね・・・

あつけない戦い

えと、着きました

雑魚たちは脅して縛つて、（あとでお手伝いさんとして動かせて）

誰だつたつけ？

まあ魔王？あー倒した。うん弱かつた。技必要なかつたよ

雑魚たちは城をきれいにして食事の用意をさせた

で、戻つてきましてね。

「大丈夫？」

「怪我なかつたな？」

「何で連れて行かなかつたんですか？」

と、口々に言われ、

「ちよつと、だつて攻撃当たつたら怪我するでしょ？」「

「「「「「それはお互い様」」」」

「で、まあ、倒してお城にすむことになりました」

「「「「え」」」」

「二ノ門」

「一ノ門」

「転送」

シハイドットのもとくGO～！（前書き）

次の話で完結
W

シルバーティッシュのやまとくGO～！

「ついたよ」

「アーニングだ」

「えつと、魔法？」

「そんな魔法ないですよ?」

「うん、これ私が作ったから」

ええええええええええ」」」

(なぜか知能も500倍になつていたのだった。つて超エリートじ
やんぶ ゆ作者)

「あ、おぬこいつね？」

「……………遅いです」

「ありやいつの間にあんなどこ」

もう城の前つて速いな

（（（（（「お騒がせいたしませシ
姫トシテリトシテ

卷之三

一
部屋まで案内しろ」

「かっこいい」

『江戸の隠居の品廻で何が一番か』

悪くないわね

6

九

卷之三

二〇一〇年六月

あとこの辺を(三)用意しないといけない。」
分岐点で

「へへ！かしこありました」

いくなんてもひとしんじやなしの？」

一
回感

「できんのかな？」

「一応トップクラスだからいけんじやないの?」

「え、なんでビリヤツでトップクラスを?」

「知らん。見てなかつたからな」

「・・・」

なに?何で私入れてくれないの?

5人で秘密の」とはなしぢやつて

いれてくんないかな?

「なんか俺」

「どひしたシークフリード

「アイツにかまいたい」

「「「「「つべくべく (笑)」」」」

「なつ、なんなんだよ」

「んジャ愛しの彼女んとこ」言つてきなさこ」

「な、何でばれてるんだ?」

「「「「態度で分かる」」」」

「・・・」

「覚えてるーー。」

「「「「なにを〜。」」」

「わ〜こ〜こ〜。」

そこでシーケフローは走り去りました。

「「「備考開始」」」

シエイデット・・・

今この想いを伝える

はは妙に緊張するな

おあいし

ついたな

「シハイデットお前に書いたい」とがある

- なに? -

すきだ

ふられるな

「わ、わたしもすき」

「...ウル」

「こんななんでもいいのか」「

「いいの！？」

神さまありがとうございます

「、、、、、、、、う、、、、、から

「ん？」

だから

「一生大事にするから！！」

ああしあわせ

፳፻፲፭

「！」

「うーん、褒美ですわ」

「あっがとう」

（略）後書き

おわりです

今までありますタ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4645m/>

日常から始まった私の冒険日記

2010年10月9日13時14分発行